

大通公園を望む窓辺から

札幌駅での『点と線』 —53分間の時刻表散策—

常任理事 橋本 洋一

7時30分、札幌駅発の特急《すずらん2号》が、6番線に入ってきた。札幌駅を7時30分に発車するのは、《すずらん2号》だけではない。8番線に入っている稚内行き特急《宗谷》も同じ7時30分に札幌を発車するのだ。6番線に入った特急《すずらん2号》と8番線にすでに入っている特急《宗谷》の間の7番線には列車がないために、《すずらん2号》から《宗谷》の乗客が見える。

本格派推理小説作家である松本清張の『点と線』を思い出させる風景である。東京駅の13番線、14番線の両方のホームに列車が入らないため、13番線のプラットホームから、15番線が見通せるのは1日の中で、この4分間しかないのがこの作品のキーポイントになっている。

札幌での会議に出席するために、苫小牧駅14時41分発の札幌行き特急《すずらん7号》に乗り込んだ。慌てたためか、本を持参するのを忘れてしまい、自然と目の前に置かれたJR北海道の車内誌に手がのびた。ページをめくると、裏表紙から数えて3～4ページに新幹線や特急列車の時刻表が掲載されていた。日頃、このページを開くことはほとんどなかったが、よく見てみると、札幌駅を同時刻に発車する列車が他に2組あることに気づいた。1つは札幌発20時00分の函館行き特急《スーパー北斗24号》と旭川行き特急《ライラック41号》で2つ目が札幌発22時00分の室蘭行き特急《すずらん12号》と旭川行き特急《カムイ45号》である。時刻表の数字を追いながら、札幌駅に到着するまでの53分間でなんとかこの文章を完成させることができた。



医師が患者になった時

理事 今野 敦

余命が限られたとき、人は何を考え行動するのだろうか。病気と戦うのは必然として、次に何を重視するだろう。そこにはその人の歩んで培ってきた人生観が大きく影響するのだろう。その人の人生において重要なことは様々、家庭や家族が大切と言う価値観も勿論賞賛されるべき、あるいは自分の趣味や生き甲斐を重視するのも悪いことでは勿論ない。医師はどうだろう？医師は社会的ステータスが高いと言われている。その理由はお金持ちだからではない、社会的貢献度が高いから、評価もされているのだ。

同僚や友人は、「無理しないで療養に専念してください」と励ましてくれる。しかし、それでは自分の人生の仕上げができない形で終わってしまうので納得はできない。苦しい思いをしながらも頑張れるのは「人生の仕上げ」をしたいと思うからだ。

地方は医師不足に喘いでいる。従来の民間医療事業者の市場原理に基づく地域医療体制の維持は困難になっている。オホーツク地域もその例外ではない。この地域の医療を守るためには、オールオホーツクチームで頑張るしかないと思う。

“熟”高齢社会において医療と介護の連携も重要課題である。どのように地域の医療・介護資源を統合・効率化を進めるかも大きな課題である。

徐々に体力が低下し、今迄できたことができなくなっていく限られた条件の中で、何ができるかを考えてきた。医療や介護を取り巻く課題の整理、地域の医療介護スタッフの連携促進、地元医師会と行政の密接な連携構築等に取り組み、休日夜間の救急医療体制の構築、医療スタッフの確保・看護学校の維持を目指しているが、未だ道半ばである。

次を担う人々の負担を少しでも軽くできるように、もう少し頑張ってみようと思う。